



# IUFRO-J NEWS

No. 33 (1988. 3)

## ローマ理事会報告(その1)

ユフロ理事・林試 小林 富士雄

昨年(1987)12月7~11日、ローマのFAO本部ビルで第21回理事会が開催された。理事会メンバー21名、副部長11名、特別参加6名、計38名の出席があり、日本からは信州大学の木平氏(Div. IV副部長)と筆者が参加した。以下、その概要を報告するが、このうちプログラム委員会については木平氏に報告して載く。

### 1. 開会

開会冒頭に、FAO副事務局長D. J. Walton氏が歓迎挨拶を行った。氏はFAOが熱帯林行動計画(TFAP)を重視していることを強調し、ユフロの協力を要請した。また特に、FAOの苦しい財政事情について例をあげて述べた。

ユフロBuckman会長のステートメント要旨は次のとおり。①ユフロの加盟機関が625に増えた(102か国、15,000人)ことは喜ばしい。②1988年1月に事務局長がOtman BeinからHeinrich Schmutzenhoferに交替する。③次回大会(1990年モントリオール)が“Science in Forestry-Entering IUFRO's Second Century”のテーマで開催され、1992年に年100年記念祭がユフロ誕生の地エーベルスワルデ(東独)で開催される。④ユフロの二大プロジェクト「森林衰退と大気汚染特別計画」と「途上国特別プログラム(SPDC)」に重点をおく。

そのあと、議事日程の承認、前理事会議事録の承認を型どおり行った。

### 2. 事務報告

Bein事務局長が1987年の事務、とくに年報、ユフロニュース、新加盟機関と新加盟国(アルバニアとナミビア)、事務局人事などを報告したあと、退任を記念し

てユフロの歴史を回顧した。Bein氏は1973年ウィーンにユフロ事務局が設置されて以来15年間事務局長をつとめてきた。

### 3. TFAP

FAO林業部長Flores Rodas氏がTFAP(熱帯林行動計画)について大要次のような説明を行ってIUFROの協力をもとめた。TFAPが重点をおいている分野は、土地利用と林業、林産業の発展、燃料とエネルギー、熱帯林生態系の保全、啓蒙普及制度などである。現在、対象として考えている国は、アフリカ20、中南米15、アジア18、合計53か国である。

### 4. 途上国特別プログラム(SPDC)

SPDCのコーディネーターQscar Fugalli氏が最近の活動報告と今後の活動計画を詳細に述べ、議論が行われた。

1987年早々にアフリカ地域責任者(Regional Advisor)としてIyamabo氏が任命され、その事務局がナイロビ(ケニア)に設けられた。同年3月北アフリカの研究設計ワークショップ(第二次)が行われ、ついで7月にペルーでラテンアメリカワークショップが多目的樹種のテーマで開催された。9、10月の6週間にわたって、「研究者のための統計的方法」の研修がオーストリアで開かれ、これにはオーストリア政府とFAOが財政援助をした。そのほか、東南アジアの木材有効利用についてのアクションプランの取りまとめが行われ、さらに途上国むけの情報サービス誌が2回発刊された。

今後の予定としては、近々二つの研究設計ワークショップが行われる。一つは南アフリカ諸国を対象とし、低位生産地の回復および多目的樹種の遺伝育種を狙ったもの。

その二つは英語圏カリブ諸国で、テーマは未確定だが多分流域管理となろう。

最後に、SPDC の発表形態として2年前に提案、承認された国際林業研究評議会 (INCOFORE) を実現に近ずける方策を探るため、コンサルタント (2名) に依頼することが提案され、そのため予算使用が承認された。コンサルタントの1名は国際的的林業研究の組織に詳しい人、もう1名は途上国問題に詳しい人を選ぶこととされた。

#### 5. 森林衰退と大気汚染特別計画

本特別計画 (Task Force) の主査である W. Baltenweiler が二つの集会について報告し議論が行われた。

本計画の第1回集会が1987年西独トリプシュタットで開催された。この議事録はユフロ事務局に依頼すれば買える。また同年11月ジュネーブで第10回ヨーロッパ大気汚染問題国際集会在開催された。この提出論文についてもユフロ事務局から提供可能である。

この特別計画を進めるための特別支出の要請が主査から出されたが、決論に至らなかった。

#### 6. 運営委員会報告

分科会形式で3回にわたって開催された運営 Administration 委員会 (主査 J. Cayford) の結果が報告され議論された。

##### a) 事務局再編問題

1987年11月に行われた事務局レビュー (主査 J. Cayford) の結果がまとめられた。このレビューの目的は、拡大・複雑化するユフロ活動に対応できるよう事務局の組織を再編成することである。レビューの内容は事務機能の権限分散、スタッフ、事務局スペース、コンピュータ化、オーストリア政府との契約問題など広範にわたるので割愛する。

最大の問題は、増大する事務量がウィーンに集中し、その結果オーストリア政府に過重な負担を強いていることである。事務機能のうち可能なものを分散する方向は、スイスに財務部門を分離しておくことなど、従来もとられてきたが、この方向をさらに進めることが承認された。ユフロニュースの発行配布事務をスウェーデンに移すことがスウェーデン政府の了解のもとに現在進められているのはその一環である。

##### h) 予算

問題になっている予算関連案件、すなわち、4年前から発行されているスペイン語版ユフロニュース印刷費、事務局コンピューター購入費、大気汚染・途上国特別プログラム関係費などが審議された。

##### c) 国際関係

FAO とユフロの協力、SPDC と ICRAF との技術協力、SPDC への資金援助 (ISF, オーストリア, 世銀, UNDP, IDRC (カナダ), GTZ (西独), USAID (米国) など), UNEP, ITTO の会議への出席などが報告された。

##### d) ユフロニュース他

前理事会で発足したユフロニュース検討小委員会が検討結果を報告した。ユフロニュースの記事の範囲を従来よりひろげ、たとえば科学的な内容を含む特別トピックとかユフロに関係ある出版物の紹介なども載せる。但し、ユフロニュースの性格は Voice of IUFRO であって、科学誌になるべきではないという立場が確認された。小委員会の意見として広告をのせることも提案されたが、反対意見も多く結論がでなかった。なお既述したように、ユフロニュース取扱事務のスウェーデンへの移管時期は1989年を目標に次期理事会で論議することとした。

そのほか、Annual Report, Guidelines for Officers などの改訂版発行の是非が論議された。

##### e) 会費滞納問題

ユフロ財政を支えている加盟機関の会費滞納の問題が財務担当者から紹介された。1984年以降4年以上滞納のものは43機関である (うち日本1機関)。その処置として、これから種々の方法で請求し、なお効果がない場合には7月末を限度に会員名簿から除くこととされた。

#### 8. プログラム委員会報告

何回かの分科会形式で行われたプログラム委員会 (主査 Salleh 副会長) の結果が論議された (木平氏の報告参照)。

#### 9. 栄誉・賞委員会

ユフロ学術賞の年齢制限 (現行45歳) を下げる件を中心に論議され、参考までに挙手で意見を問うたところ



Bein 事務局長を送る

(左から Buckman 会長, Bein, Schmutzenhofer 新事務局長)

3/4 が現行年令に賛意を示した。種々の榮譽・賞の見直しを行う予定であったが小委員長が欠席のため次期理事会にもちこされた。

#### 10. その他

次期(22回)度事は1988年9月3~10日米国オレゴン州ユバリスで行われる。23回(1989)は北京、24回(1990)はオーストリアとチェコスロバキアを予定し

ている。

最終日には、長い間事務局長をつとめた Bein 氏に謝意を現わすため出席者一同から記念品贈呈が行われた(前ページ写真)。

今回の理事会は、エキスカージョンも少なく、連日会議日程が組まれて審議が能率よく進行した。その意味で実務型理事会であったといえる。

## ユフロ理事会報告(その2)

### —プログラム委員会から—

信州大学 木 平 勇 吉

去る12月ローマで開かれたユフロ理事会のプログラム委員会の討議の概要を報告する。この委員会は第1部会から第6部会の代表で構成され、ユフロ総会をはじめ各レベルでの研究集会について内容、日程などユフロ研究活動そのものを企画する組織であり、今回は次の3点について検討された。

- (1) ユフロ100年記念大会(1992年)
- (2) 次期モンリオール総会(1990年)
- (3) ユフロ部会の改組

#### 1. ユフロ100年記念大会

1982年ドイツ、オーストリア、スイス、フランスそしてハンガリーの林業研究機関が現在の東ドイツのエベルスワルドで国際機関連合を創設した。これが今日のユフロの誕生であり、1992年は100年目にあたるので記念大会が行われる。この大会の準備委員はユフロ各部会の代表と東ドイツ代表とで構成され、提案されたプログラムによると、日程は1992年8月17日からの1週間でベルリンで開かれる。大会の目的はユフロの過去100年の活動をふりかえり評価することであり、その機会に「ユフロ100年」が第6部会の林政史分科会の責任で出版される。大会のテーマは「Research for sustained yield and other benefits from forests」で、とりわけ林業およびユフロ発展に果たしたドイツの役割が強調されよう。最初の3日間(月、火、水)は開会式、記念講演、部会別研究討論、4日目(木)は総括と閉会式、5日目(金)はゆかりのエベルスワルドへのエキスカージョン、その他にオペラやポツダム、ドレスデン、ベルリンなどを訪れる女性のための社交行事が組まれている。この記念大会は日本人にとって非常に興味深い機会で、

ドイツから学んだ日本の伝統の原点を教科書ではなく歴史上の事実により見つめることが出来、日本の林学の発達を評価する絶好の機会であろう。夫妻同伴で参加することがこの記念大会に似つかわしいと私は思っている。

#### 2. 次期モンリオール総会

ユフロ100年記念大会が過去を振り返るのに対してモンリオール(カナダ)での次期ユフロ総会とは将来への発展に目を向ける機会である。1990年8月5日から2週間にわたる次期総会のテーマは「Science in forestry-entering IUFRO's second century」で、特に今日の緊急課題である熱帯林と大気汚染、さらには森林の社会・経済的側面及び新技術が注目されよう。カナダの大会組織委員会によると日程は図-1のとおりである。

エキスカージョンはカナダおよび一部アメリカを含めて19コースが選ばれ、それぞれ興味深いテーマが設定されている。第1回日の案内状は本年3月に出来るが、参加費は1人200usドルで研究の成果はポスターセッションか部会別集会で発表できる。ただし発表時間は図のとおり非常に限られている。なお大会の前にはアメリカ林学会の総会があり、両方に参加出来るようになっていた。蛇足ながら私の個人的見解として、総会とは研究成果が総括される所であるから、個別の研究を十分に討議しあい存分にやるにはテーマ別の小集会が良い。これらテーマ別集会は部会ごとに1年に3~5ヶ所で開催しているので、それらの機会をもっと利用すべきではなからうか。

#### 3. ユフロ部会の改組

ユーゴスラビアの総会以降第4部会(測定、経営、林政)と第6部会(統計、リモセン、多目的利用など)と

図-1 モントリオール総会の日程表

	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SATURDAY
9-10	Opening Ceremony Keynote	Social (Develop. Countries)	Economy (Europe)	Biology (USA)	Physico-Chem.	
I	Air Pollution					Closing Ceremony
10-12	Keynote					
II	Political					
12-2	LUNCH & POSTERS SESSION					
2-5	Review Pollution & Concurrent	B 1,3,5 T 2,4,6	Field Trip	T 1,2,3,4,5,6	B 1,3,5 T 2,4,6	
	Review Tropical Forestry	T 1,3,5 B 2,4,6			T 1,3,5 B 2,4,6	
5,6, or 8	Reception	SATELLITE MEETINGS			Reception	

Note:  
B=Business  
T=Technical

図-2 第4部会と第6部会との改組案

DIVISION 4

INVENTORY, GROWTH, YIELD AND INFORMATION SCIENCE

- S 4.01 Mensuration etc.
- S 4.02 Forest Res. Inventory
- S 4.04 Forest Mgt. Planning
  
- S 6.02 Statistical Methods..
- S 6.03 Information Systems..
- S 6.05 Remote Sensing
- P 6.01 Revision of ODC

P 4.02 goes to Division 3

DIVISION 6

SOCIAL, ECONOMIC AND POLICY MATTERS

- S 4.07 Social and Economic aspects..
- S 4.08 Forest Policy, Law..
- P 4.02 Economics and Harvesting thinnings (into Div. 3)
- P 4.11 Forest Sector Analysis
- S 6.01 Forest Landscape, Recreation etc.
- S 6.06 Mgt. of Forest research
- S 6.07 Forest History
- S 6.08 Applying Results of Forest Res.
- S 6.09 Philosophy and Methods of For. Res.

の再編成が検討されている。現在第4部会と第6部会との意見交換が進められ、図-2のような提案が出来る状態になり、この案は理事会で支持されたが検討を続けて次期モントリオール総会に結論が出される予定である。今までの関係者から出た意見を私なりに要約するならば次のようになる。(1) わるわれ研究者はどの部会に属してもいいし、部会交流が必要であるから、部会の構成にはさほどこだわらない。(2) しかし、特定のテーマについて集会を開いたり活動を行うとき、興味を同じくする仲間が同じ部会に属している方が行動しやすいから、まとめある部会構成はユフロに必要である。(3) したがっ

て、第4部会と第6部会および第3部会の一部についてまとめ直すのではない。

ところで、私の周辺にもこの種の議論には“ガンバル”人が多いが、世界にはより多くの意見があるので結論には時間をかける予定である。これに関して意見をいただければ幸いである。

4. ローマとエクスカーション

おわりに、ローマの印象について。理事会の最終日にイタリア側の案内でシルセオ国立公園を訪れた。ローマ近郊の海岸に位置する森林公園でレクリエーションと保全とを目的に1934年に設けられた所で、動・植物が豊

かで古代遺跡があり、そのために山火事防止をはじめ管理は林野庁により良く行われている。小高い山頂からイタリア北部の豊かな農村と地中海を眺めたり、30名余りながら文字通り世界の林学の仲間との1日は興味深かった。ところで、私は元映画狂で、ローマは「終着駅」や「ローマの休日」を通してあこがれの地であり、クリスマス前のこの町に散在するシーザからヘップバーンまでの遺跡は私のイメージ以上のものを与えてくれた。私は林試の小林氏とオーストラリアの Kikkawa 教授と

同行の機会を得て、地元 FAO 勤務の加藤氏夫妻の案内で愛の泉、古代コロシム、終着駅そしてイタリア民謡つきの料理店などを一夜のうちに訪れる幸運に恵まれた。どうも理事会の内容よりローマの町の印象が私を強くひきつけている。なお最後にご注意を。もしローマへ Mrs. を同伴される機会があれば100万円程度は用意される方がよい。ローマは買物好きの女性にとって世界で最も魅力ある町である。“幸い”にも今回は1人旅であった。

## 国際集会「森林の成長増加のための水と養分の管理」

(S 1.02-09) に参加して

東京農工大学 生 原 喜 久 雄

1987年10月19日～22日にオーストラリアのキャンベラで上記のセミナールが開催された。後援は IUFRO (Div. 1), オーストラリア林業審議会 (Australian Forestry Council) および連邦科学技術院 (CSIRO) の林業研究部で、ホストは CSIRO 林業研究部のスタッフである。

参加者は15か国から133名(同伴者を含めると143)に達した。東南アジアからの出席者は少なく、台湾(1名)、タイ(1名)で、日本からは川名明教授(東京農業大学)夫妻と著者であった。

発表論文は、口頭発表40編(うち招待論文10編)、ポスター31編であった。発表時間は招待論文30分、その他の論文は15分で、3～4論文ごとに30分程度の討論がなされた。

今回のセミナールは大きく4セッションに分けて行われた。

第1日目(10月19日)

セッション“林木成長の決定因子としての水と栄養”

第2・3日目(10月20・21日)

セッション“水と栄養の管理とそれらの相互作用”筆者はここで“幼齡林での養分動態に及ぼす保育施業の影響”を発表した。

第4日目(10月22日)

セッション“林木・林分の成長に及ぼす水と栄養およびそれらの相互作用に関するモデル化”

セッション“水と栄養状態に応じた管理体系”

朝8～9時および夜8～9時半のポスターがあり、かな

りハードなスケジュールであった。

林木の水生理、光合成に及ぼす土壌水分、灌水および灌水と施肥とを組み合わせた場合の成長効果や養分吸収、さらに酸性雨など広範囲にわたる内容の発表がなされた。しかし水と養分とを関連させて調査していく必要性は多くの論文で強調されてはいたが、具体的に調査した報告は少なく、特に第4日目の水と栄養の相互作用ならびにその相互作用から導きだされるそれらの管理体系に関しては、これからの課題である。たとえば、灌水および灌水に施肥を組み合わせた研究でも、林木の成長増の報告(多くは乾燥地の調査なので当面ではあるが)の域から出ておらず、これらが有機物の分解や土壌水の養分要素の動態特性に及ぼす影響に関する報告はみられなかった。

参加者はオーストラリアの研究者が多いため、質疑応答などは理解しにくく、国際的なセミナーなので、もう少し配慮されてもよいのではないかと思えた(こちらのヒアリングの力がないことに問題があるのだが)。国際会議では発表者が自分の研究論文の位置付けを十分時間をかけて述べることに、また質疑の場でも自分の研究結果を機会あることに述べようとする姿勢にはいつもながら感心させられる。その点では日本の学会ももう少し活発な質疑応答(演者の欠点を指摘するのではなく、より啓蒙的な建設的な意見で)ができないものであろうか。ちなみに投稿論文は審査の上で、国際雑誌 Forest Ecology and Management (Elsevier) の特別号として公表される予定である。

3日目(21日)の午後は、CSIRO およびオーストラリア大学(ANU)などの共同研究がなされているラジャータマツ(1973年植栽)林での、灌水や施肥が土壤中での養分動態に及ぼす影響や養分循環におよぼす影響、光合成や水ストレスに及ぼす影響など多くのテーマが1つの林分で試験調査されている実験林を見学するとともに、水と栄養に関する現地討論が行われた。また、セミナーが終了した翌日の24日には、CSIRO 林業研究所で、オーストラリアの森林資源、原生林、ユーカリの集約施業などについての説明および討論。ANU 林学科の大学院生によるユーカリの水関係と立地の適応性、自生および外国樹種の比較栄養、耐寒性の生理についての研究発表、質疑応答がなされた。

エクスカージョンとして2つのツアー(南オーストラリアの南東および西ビクトリア地域(これらの地域をGreen Triangleと呼んでいる)でのラジャータマツの造林地や地力に関する試験地などの見学と南東クィーンズランドでのマツ、アローカリア、ユーカリの造林地、ユーカリの天然林および降雨林の見学)が企画された。川名明夫夫妻および筆者は前者のツアーに参加した。

マウントキャンピヤを中心とした海岸地帯での、農耕や牧畜に適さない不毛なポドソル化(下層へ塩基が移動する様な土壌をポドソルと称している)した砂質土壌に、毎年およそ4,000 haのラジャータマツが造林(造林面積12万ha)されている。亜鉛の欠乏地帯なので、亜

鉛施肥が行われていること(無施肥地帯ではDie backが出現する)、また銅やホウ素の肥効も高く、典型的なこれらの欠乏症状をみる事ができた。幼齢林では、わずかな下草のシダ類を除草剤で枯殺すると植栽木の成長が著しく良くなること(養分や水分の吸収競争の凄さ)など、地力の非常に低い地帯での造林の難しさが理解された。

1983年2月16日のAsh Wednesdayの山火事跡地は丘巻で、マウントキャンピヤ地域だけで、2万1千haのラジャータマツ林が燃え、600万m<sup>3</sup>の立木が消失した。現在、プロジェクトをつくり、精力的に造林しているが、今でもかなりの面積が枯死木の状態で放置されている。

セミナー中に次の様なアナウンスメントがあった。

IEA(International Energy Agency)のCPC-10プロジェクト(The International Consequence of Intensive Forest Harvesting on Site Productivity)によるExperimental Design and Research Strategies in Long-term Site Productivity Researchのミーティングが1988年7月28日~8月3日にブリティッシュコロンビア大学(バンクーバー、カナダ)で開催される。詳細については下記へ、J.P.(Hamish) Kimmins, Dep. of Forest Science, University of British Columbia, #270-2357 Main Mail, Vancouver, B.C., CANADA

## IAHS 集会に参加して

林業試験場 服 部 重 昭

IAHS(International Association of Hydrological Sciences)集会が1987年8月9日~22日の2週間にわたり、カナダのバンクーバー市(ブリティッシュ・コロンビア大学)で開催された。IAHSはIUGG(International Union of Geodesy and Geophysics)を構成する学会の一つである。ほかに測地学、地球物理学、気象学など六つの学会があり、これらの学会も第19回IUGG総会として同時に研究集会をもった。そのため、世界各国からの参加者は全体で2000名を超えたと聞く。IAHS集会への参加者もカナダ、アメリカを中心に約500名にのぼり、最近の水文学関係の集会では最大規模のものになった。ダウンタウンの劇場で行われた開会式は、一大イベントの始まりを予感させるものであった。

IAHS集会のテーマは、気候変動における気候・水文現象の相互作用、水循環における汚染物質の輸送、雪氷の問題、環境保全からみた水管理などで、最近の水問題の多様化を反映し、学際的なトピックスが取り上げられた。シンポジウム(HS)とワークショップ(HW)の課題は下記のとおりである。なお、このほかにポスターセッションも行われた。

- HS1: Large scale effects of seasonal snow cover
- HS2: Forest hydrology and watershed management
- HS3: The influence of climate changes and climatic variability on hydrological

regime and water resources

HS 4: Irrigation and water allocation

HS 5: The physical basis of ice sheet modeling

HS 6: Dynamic-systems approach to natural hazards

HW 1: Methods of runoff and streamflow simulation applied to various physiographic and climate conditions

HW 2: Spatial variability and representativeness of hydrogeological parameters

HW 3: Estimation of areal evapotranspiration

HW 4: Remote data transmission

HW 5: River ice

HW 6: Erosion and sediment transport

HW 7: Hydrological sciences in developing countries

HW 8: Estimation of natural baseline conditions as a basis for detecting changes in water quality

ここでは筆者が興味をもって参加した HS 2 (森林水文学と流域管理) について、研究発表の概要と感想を述べる。

HS 2 の発表は内容により酸性雨、侵食、雪の水文学、蒸発散、土壤水分とその化学、流域水文学、流出シミュレーションの七つに区分され、研究発表 (25 分程度/編) と総合討論という形式で進められた。

酸性雨ではカナダ、アメリカ、イギリス、フランスから森林、湖における化学的物質の動態や収支、生態系への影響が報告された。この中で、積雪、融雪中の化学的物質の挙動など降雪を含んだ水系への影響を取扱っているものが多いのは意外であった。侵食では森林伐採、山火事、土地利用の変化など、森林に加えられたインパクトが土壤侵食を増大させることを調査した報告が大半を占めた。森林の消失は土壤侵食を誘起し、林地生産力の減退や土砂災害を招くことはすでに知られていることである。林地の保全と生産力の維持・向上を調和させながら、各地に適した森林管理のあり方を明らかにすることが望まれる。その意味で、土壤侵食の実態解析と同時に、防止のための実際の施業や対策の効果に関する研究発表がもっとほしかった。

雪の水文学に関しては 4 件の発表があった。このうち 3 件はアメリカの林業試験場が行っている研究で、林地と無林地の比較や帯状ならびに部分伐採の試験を通して、森林の積雪、融雪に及ぼす影響を解明しようとするものであった。まだ森林の影響を定量的に評価できるまでに

は至っていないが、水資源確保に適した森林の総合的な管理法をさぐるうえで、貴重な資料になると思われる。

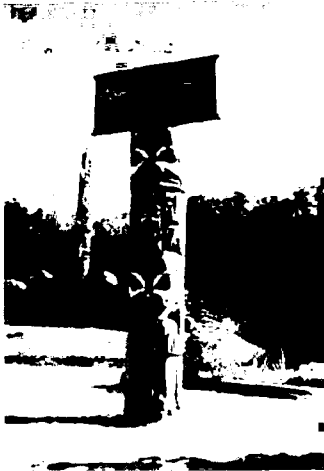
蒸発散に関する研究では、蒸発散量の測定結果とそのモデル化が中心であった。蒸発散を物理的に究明するという共通の認識は理解できたが、解析手法が様々で、どの手法が望ましいのかわかりにくい。世界的にみて、蒸発散に関する研究蓄積は多いので、対象の広がり、入手可能なデータ、要求される精度などを考慮して、森林蒸発散の推定方法を体系的に整理する必要があると感じた。また、我国では研究実績が少ない広域からの蒸発散も今後の課題であると思った。

土壤水分に関する研究発表は、浸透水の動態の解明と、伐採や造林に伴う化学物質の循環・収支の変化を取扱った内容のものに分けられる。前者においては、土壤水の測定装置が多少参考になる程度で、不均質な山地土壤中の水移動が物理的かつ統一的に把握できるような新しい知見はみられなかった。

流域水文と流出シミュレーションでは、造林や伐採が河川流量に及ぼす影響の解析と、そのモデル化に関する報告が多かった。森林伐採の影響は、これまで世界各地で実証されている結果と同様で、積雪のある亜高山帯の流域も含め、総流出量やピーク流量は例外なく増加した。この点は従来までの成果への上積みすぎないであろう。また、シミュレーションモデルについては、個別水文現象を組み込み、森林条件の変化から流出量の変化を予測するモデルが提案されていた。これは森林の水保全機能の定量化を進めるうえで参考になると考えられた。

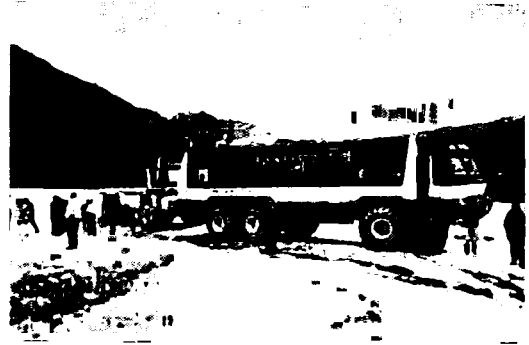
以上、HS 2 の研究発表の概要を述べたが、すべての発表を聞いたわけではないし、理解できない所も多々あったので、片寄った意見になっているかもしれない。HS 1 ~ HS 5 については論文集が刊行されているので、興味ある方はこれらを読んでいただきたい。

HS 2 の発表会場は 200 名程度収容できる大きな階段教室で、いつも 50 名ほどの参加者があった。ジーンズやショートパンツといった普段着の人や、コーヒーを飲みながら聞く人があり、くつろいだ雰囲気ではあった。しかし、国際研究集会への参加は初めてなので、かなり緊張した。発表前日にはその時になってまごつかないように、マイク、照明、プロジェクター、ポインターの操作を練習した。発表者への注意事項には、原稿を読むのではなく、聴衆に語りかけるように話さない、とあった。これはできない相談であった。その代わりに、語尾を「上げよ」、「下げよ」、「ストレスを置け」などの記号を原稿にいっぱい書き込み、語りかけるように読むくまりをした。また、緊張をほぐすようにスーツではなく、



ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館の  
トーテムポール

セーターを着てやってみた。こんな努力のかいがあっ  
てか、発表はスムーズに終えることができた。しかし、や  
はり残念なのは、総合的討論の場で議論の中に入り、自  
分の意見を述べるができなかったことです。日本語  
ならもっと明確に説明できるのに、とはがゆく思うとと



雪上車によるコロンビア氷原ツアー

もに、自分の語学力の不足を痛感したわけです。

エクスカーションには参加しなかったのですが、発表  
の合間や週末にバンクーバー市内の観光と、州部ビクト  
リア、カナディアンロッキーへの小旅行を楽しみました。  
旅行中にも失敗を重ねました。カナダ滞在中のいろい  
ろな経験から、外国ではチャレンジすることが大切であり、  
「求めよ、さらば与えられん」という主義で行動する必  
要があることを覚えました。そんな教訓を胸に、夏も終  
りに向うバンクーバーを離れました。



## 研究集会などのお知らせ

## IUFRO 分科会 S5. 04-08 機械加工専門部会

1988年5月18日(水) 於: サンパウロ

- S. 04-08 機械加工専門部会のプログラムが下記のとおり決定しました。
- 10:00-10:05  
熱帯材の製材と機械加工における最近の進歩, フランス, Centre technique de bois et de l'ameublement, Christian G. Sales
- 10:05-10:15  
ユーゴスラビアにおけるナラとカバの製材技術の開発構想, ユーゴスラビア, University of Zagreb, Djordje Butkovic
- 10:15-10:25  
電算化された装置の広葉樹製材工場への応用, アメリカ, Purdue University, Daniel L. Cassens
- 10:25-10:35  
ユーゴスラビアの製材工場におけるナラ製材の品質に及ぼす影響, ユーゴスラビア, DI "Cesma", Tomislav Prka
- 10:35-10:45  
薄鋸による二次加工の現在の水準を越えて, アメリカ, California Cedar Products Company, William M. McKenzie
- 10:45-10:55  
薄鋸による挽材の経済性: ケーススタディ, アメリカ, California Cedar Products Company, Ryszard Szymani, Fred Salemme, Luigi Trinchera
- 10:55-11:05  
製材の一貫生産システム, ニュージーランド, Forest Research Institute, J. Louw van Wyk
- 11:05-11:15  
車載製材工場, ナイジェリア, University of Ibadan, S.K. Sanwo
- 11:15-11:25  
コンピュータによる製材の最適化の1つのモデル, ユーゴスラビア, University of Zagreb, Vladimir Hitrec, Marijan Breznjak, Ksenija Segotic
- 11:25-11:35  
モンテカルロ法による木材生産工程のシミュレーション, アメリカ, Purdue University, Harry G. Gibson, Joseph S. Friday
- 11:35-11:45  
サイレントロイを用いた丸鋸金属音の抑止, 日本, 京都大学, 服部順昭, 飯田朋治, 泉信爾, 野口昌巳
- 11:45-11:55  
種々の減衰を施した横切り丸鋸の騒音研究, アメリカ, California Cedar Products Company, John Rhemrev, Tomas Cano
- 11:55-12:15  
木材の主な酸性成分の腐食作用とそれらの工具に及ぼす影響, オーストラリア, Forestry Commission of N.S.W., Alex Krilov
- 12:05-12:15  
木材加工用刃物の極低温処理の摩耗に及ぼす影響, アメリカ, California Cedar Products Company, Ryszard Szymani, Luigi Trinchera
- 12:15-12:25  
高密度熱帯産広葉樹小径木ロータリー切削, フランス, Universite des Sciences et Techniques de Languedoc, Bernard Thibaut
- 12:25-12:35  
熱処理を利用した丸鋸の新しい腰入れ方法, 日本, 京都大学, 野口昌巳, 職業訓練大学校, 梅津二郎  
(京都大学・野口昌巳)

IUFRO/S 6.05 (リモートセンシング) と国際写真測量学会 (ISPRS)  
第7部会との共同セッションの案内

ISPRS 第16回大会が昭和63年7月1日～7月10日に京都国際会議場で開催される機会を利用して、表記の共同セッションを計画していることについては、前号でお知らせしてあります。

2月末の発表論文募集は締切り期日までに申込みのあった論文数は23編でした。国別にみると、カナダ(3)、西ドイツ(3)、日本(3)、オランダ(2)、バングラディッシュ(2)、イタリア(2)その他トルコ、中国、フィンランド、インド、インドネシア、タイ、デンマーク等です。

研究論文の最終締切りが5月中旬ですので、それまでには若干の変更もあるとは考えられますが、最新センサ

ー、地理情報システム、高分解能センサーに関する話題やリモートセンシングの広範囲な利用に関する話題での共同セッションも盛上るように思えます。

この共同セッションの日程が下記のように決定されましたのでお知らせします。

セッション F1	1988年7月6日(水)	11:00～12:30
" F2	同上	13:30～15:00
" F3	7月7日(木)	9:00～10:30
" F4	同上	11:00～12:30
" F5	同上	13:30～15:00

以上がこの共同セッションの近況ですが詳細については、筆者に御連絡下さい。(国立林試・大貫仁人)

ユフロ-J 機関代表会議の開催について

ユフロ機関代表会議を第99回日本林学会大会開催地の新潟大学で、下記のとおり開催します。

記

1. 日時: 昭和63年4月5日(火)  
12:00～13:00
2. 場所: 新潟大学教養部二階256番教室

3. 協議事項

- 1) 昭和62年度事業報告
- 2) 昭和62年度会計報告
- 3) 昭和62年度会計監査報告
- 4) 昭和63年度事業計画
- 5) 昭和63年度予算案
- 6) 昭和63年度その他

(事務局)

IUFRO-J NEWS No. 33

昭和63年3月28日

編集・発行: 国際林業研究機関連合

日本委員会事務局